

研究主題

確かな学力の定着に向けた組織的取組の試み

～八枝スタンダードの作成を通して～

北九州市立八枝小学校
校長 太田 敦生

<論文要旨>

キーワード：学習規律、授業づくり、学習環境、八枝スタンダード
言語活動の充実（他教科・他単元との関連）、交流活動

本研究では、学校全体で組織的な取組を行うことで、児童に確かな学力を定着させることをねらうものである。本校の学校教育目標は「思いやりの心を持ち、自ら学び考える、心身ともに健康な児童の育成」である。本校では、自校の抱える課題や社会情勢の分析の結果から、学校教育目標の達成のためには「確かな学力」の定着が必要不可欠と考えた。確かな学力については、北九州市教育委員会の方針を基に『教科等における「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学習意欲」をバランスよく身に付けた力』と定義付けた。本校では、昨年度より北九州市学力向上ステップアップ事業（第Ⅱ期）を受け、推進指定校として3年間の研究（本年度2年次）に当たっている。

研究推進に当たって、学校全体での組織的な取組を実証するための研究組織として、三つのプロジェクト班（学習規律班、授業づくり班、学習環境班）を設け全職員がいずれかに所属し、それぞれの班の活動を通して確かな学力の定着を目指した。また、学習規律や学習指導法の共通理解や指導の徹底のために「八枝スタンダード」を作成し、その成果と課題を検証していった。

児童や教員へのアンケート調査や学力テストの結果から、教員の意識の高まりと児童の確かな学力の定着を確認できたことが成果である。児童の日常の生活にも落ち着きが増え見られようになった。また、実践交流会において、本校の実践とともに他校での実践を数多く交流することができた。学校全体での組織的取組の効果を実感することもできたと同時に、新たな課題が明らかになったり、実践交流会で今後の研究の参考となるご指摘もいただいたりした。これらを基に2年次の取組を中心に、これまで2か年の取組を検証し、さらなる学力の定着に向けた3年次の研究へ、つないでいきたいと考えている。

＜目 次＞

1	主題設定の理由	3
	(1) 社会の要請から	
	(2) 本校の実態から	
	(3) 学校教育目標の具現化から	
2	主題のとらえ	4
3	研究仮説	5
4	研究組織図	5
5	研究計画	5
6	研究の実際	6
	(1) 研究経過	
	【1年次】	
	【2年次】	
	〔学習規律班〕	
	○ 概要	
	○ 具体的な手だてと考察	
	〔授業づくり班〕	
	○ 概要	
	○ 具体的な手だてと考察	
	〔環境整備班〕	
	○ 概要	
	○ 具体的な手だてと考察	
	〔学力向上推進委員会〕	
	○ 概要	
	○ 具体的な手だてと考察	
	(2) その他の取組	
	① 学校図書館の整備	
	② 専科指導教員による授業（理科）	
7	研究の成果と今後の課題	19
	(1) 1年次の成果と課題及び課題に対する2年次の成果	
	(2) 今後の課題	
	＜参考文献＞	20

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

改正教育基本法や学校教育法の一部改正を受け改定された小学校学習指導要領が、平成23年度より全面実施となった。新学習指導要領では、教育の基本理念「生きる力」が引き継がれるとともに、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和がこれまで以上に重視されることになった。

北九州市では、その内容を受けて策定した「北九州市子どもの未来をひらく教育プラン」に基づき、全市的な目標として「一人一人に『生きる力』をはぐくむ学校教育の創造」を掲げ、「心の育ちの推進」「確かな学力の向上」「健やかな体の育成」の三つの柱を中心に、本市の教育プランの施策を具体的に推進している。

特に三つの柱のうち、「確かな学力の向上」については、「北九州スタンダード すべての教師のための授業改善ハンドブック」(平成22年3月)や「北九州市学びチャレンジプログラム 活用する力を高めるワーク」(平成22年4月)、「北九州スタンダードカリキュラム」(平成23年3月)を作成するなどして、児童の学力の定着・向上に努めている。

そこで、平成23年度から3年間「北九州市学力向上ステップアップ事業第Ⅱ期推進指定校」の委嘱を受け、本市教育の重要課題の一つである児童の学力の定着・向上を目指すことにした。

具体的には、主題を「確かな学力の定着に向けた組織的取組の試み～八枝スタンダードの作成を通して～」と設定し、学習規律、学習指導方法(学び方)等についての八枝スタンダードを作成し、組織的に実践することを通して、児童の学力の定着を図る研究に取り組むこととした。

(2) 本校の実態から

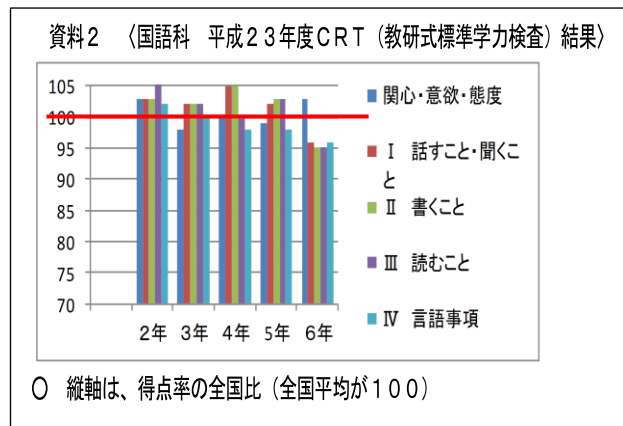
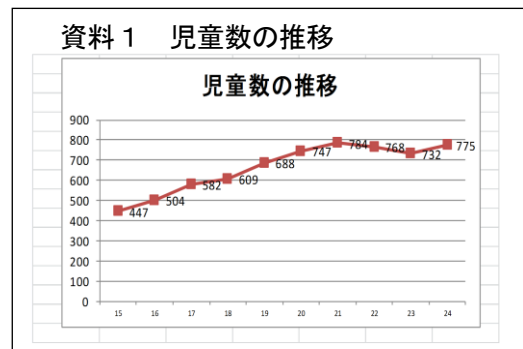
本校は、過去10年間における急激な児童数・学級増加(資料1)により、学校全体が落ち着かない状況にあった。

そのような中、学級運営や学習指導方法等が担任にまかされる傾向にあり、学校全体としての共通理解や指導の徹底が図られていない現状があった。また、平成22年度より3年連続で新採教諭(6名)

の配置があり、若年の講師も多いことから、学校全体としての教師の指導力の育成が喫緊の課題となっている。

研究面では、6年間の国語科の学習指導法の研究を通して、一定の成果が見られている(資料2)。しかし、CRTの結果の経年比較によると、学力が停滞もしくは学年や教科によっては(資料3算数科の結果)下降傾向が見られる。そこで、一つの教科の指導方法の研究に一区切りをつけ、新たな視点から学力の定着・向上を試みる時期にあると考えた。

以上のことを踏まえ、学習規律、学習指導方法等についての八枝スタンダードを作成し、組織



的に実践することを通して、児童の学力の定着を図る研究を推進することとした。

(3) 学校教育目標の具現化から

本校の学校教育目標は、「思いやりの心をもち、自ら学び考える、心身ともに健康な児童の育成」である。徳育・知育・体育のバランスを重視した教育目標を設定している。

この学校教育目標の柱の一つである、自ら学び考える児童を育成するためには、まずはその前提として基礎的・基本的な内容の確実な定着、すなわち確かな学力の定着が必要不可欠であると考えます。このことから、平成23年度より研究主題を「確かな学力の定着に向けた組織的取組の試み」とした。

2 主題のとらえ

北九州市教育委員会が発行している「平成24年度 北九州スタンダード 指導の重点」では、確かな学力の向上について次のように説明している。

「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方のバランスのとれた指導を重視する。また、体験的な学習や問題解決的な学習を重視するとともに、思考力・判断力・表現力等の基盤となる「言葉の力」を高め、言語活動を充実させる。このような学習活動を通して、学習意欲を高め、自ら学び自ら考える力を総合的に育成する。さらに家庭との連携により、望ましい生活習慣、言葉の基礎力等を身に付けさせるなど児童生徒の「学びの基盤づくり」の充実を図る。

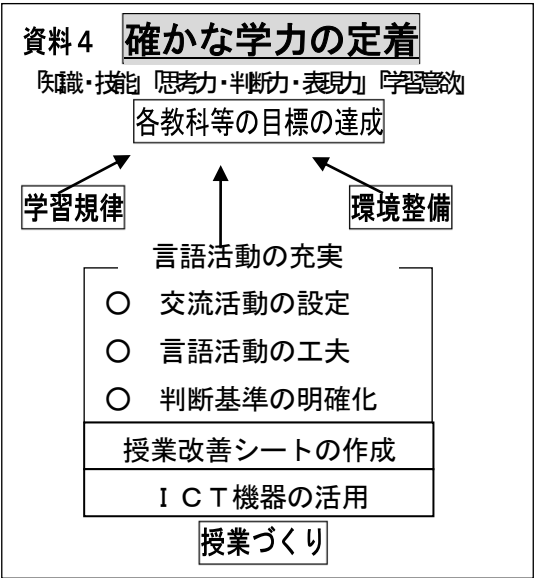
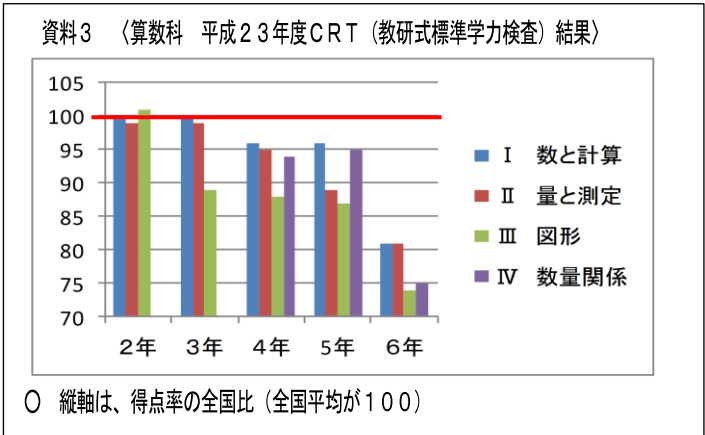
このことを踏まえ、本校の実態から、「確かな学力」を次のように定義付ける。

**教科等における「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学習意欲」を
バランスよく身に付けた力。**

児童に「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学習意欲」をバランスよく身に付けさせるためには、ある特定教科における学習指導法の工夫を行うといった一面的な取組ではなく、多面的な取組が必要であると考えます。

このことから本校では、「学習規律の徹底」「授業づくりの工夫」「学習環境の整備」の3方向から「確かな学力」の定着に迫ることとする。（資料4）

また、学校全体としての共通理解や指導の徹底が大切だと考え、全職員をそれら3方向のプロジェクトチーム（学習規律班・授業づくり班・環境整備班）に配置し、確かな学力の

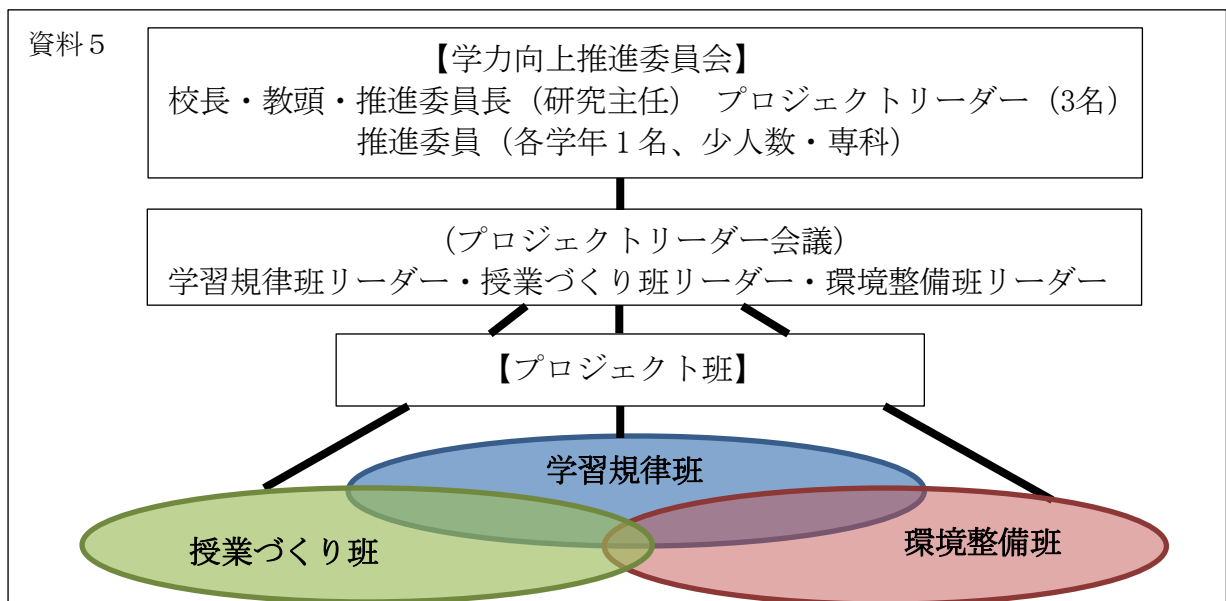


定着に向けた具体的な方策を各プロジェクトチームで企画・提案し、それを「八枝スタンダード」としてまとめて学校全体で実践するという、組織的取組（資料5）を行うこととした。

3 研究仮説

全職員を3つのプロジェクトチーム（学習規律班・授業づくり班・環境整備班）に配置し、各チームで確かな学力の定着に向けた具体的な方策を企画・提案したものを八枝スタンダードとして学校全体で実践すれば、児童に知識・技能、思考力・判断力・表現力、学習意欲をバランスよく身に付けさせることができるであろう。

4 研究組織図



5 研究計画

○ 3年間の研究の流れ

< 1年次（平成23年度） >

八枝スタンダードの試作及び実践、学力向上実践交流会の開催

※ 学力向上実践交流会の授業公開・・・低・中・高学年から1名ずつ

（新採教諭、全員研修会授業者、6・10年次教諭等を除く）

※ 授業づくり研究対象教科・・・国語科・算数科を中心として

< 2年次（平成24年度） >

八枝スタンダードの修正及び実践、学力向上実践交流会の開催

※ 学力向上実践交流会の授業公開・・・各学年から1名ずつ

（新採教諭、全員研修会授業者、6・10年次教諭等を除く）

※ 授業づくり研究対象教科・・・国語科・算数科を中心として教科を拡充の方向で

< 3年次（平成25年度） >

八枝スタンダードの完成及び実践事例集の作成、学力向上推進実践報告会の開催

※ 学力向上推進実践報告会の授業公開・・・全学級公開

（新採教諭、全員研修会授業者、6・10年次教諭等を除く）

※ 授業づくり研究教科・・・国語科・算数科を中心として全教科を対象として

6 研究の実際

(1) 研究経過

【1年次】

- ・ 主題設定、研究組織作り
- ・ 観点別到達度学力検査の分析
- ・ 各班からの計画内容の提案・審議

〔学習規律班〕

- ・ 教員へのアンケートの実施

新学期の学習規律、学習指導で困ったこと

学力向上に向け、必要と考える学習規律

- ・ アンケート結果から質問用紙の項目を決定
- ・ 学習規律に関する質問用紙(児童用・教員用)の作成と実施(資料6)
- ・ 質問用紙の結果集約と分析
- ・ 『八枝スタンダード(学習規律編)』の項目作成と全職員での共通理解
- ・ 学級掲示物、廊下掲示物の作成(環境整備班と協力のもと)

学習規律について共通理解を図った内容について、学年や学級の実態に合わせた掲示物を作成し、学習規律の定着に努めた。(資料7)

学力向上ステップアップ事業の反省

北九州市立八枝小学校

とてもよく努力した	4	努力した	3
少し努力が足りなかった	2	できなかった	1

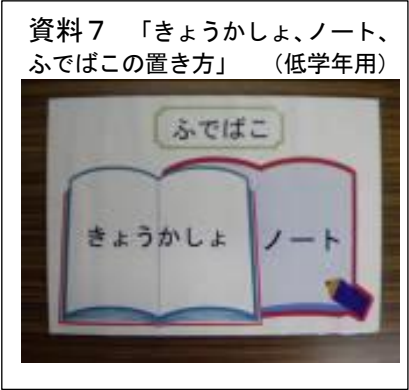
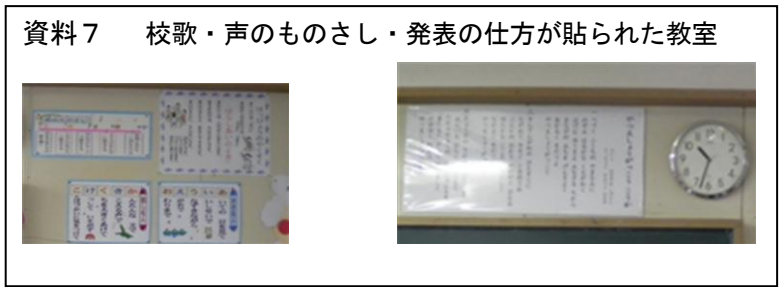
- 身の回りの整理整頓が児童に定着してきた。(4 3 2 1)
- チャイム席及び授業の準備が児童に定着してきた。(4 3 2 1)
- 名前を呼ばれたときに、返事をする習慣を付けさせることができた。(4 3 2 1)
- 発表の仕方が児童に定着してきた。(4 3 2 1)
- 友達の名前に対して拍手をしたり、認める発言をしたりする。あたたか/集団づくりができた。(4 3 2 1)
- 子ども全員を授業に参加させるように努めた。(4 3 2 1)
- 姿勢よく話を聞かせるように努めた。(4 3 2 1)
- ノートのとり方が児童に定着してきた。(4 3 2 1)
- 基礎・基本の力の定着と自ら学び考える力のバランスのよい学習に努めた。(4 3 2 1)
- 家庭学習を定着させるように努めた。(4 3 2 1)

勉強の反省

とてもがんばった	4	がんばった	3
少しがんばりが足りなかった	2	がんばれなかった	1

- 身の回りの整理整頓とんをするようにしている。(4 3 2 1)
- チャイムがなったら、前につき、授業の準備をするようにしている。(4 3 2 1)
- 名前をよばれたときに、大きな声で返事をするようにしている。(4 3 2 1)
- みんなによくわかるように発表をしている。(4 3 2 1)
- 友だちのよい発表に拍手をしたり、まわがいはやさしく褒めてあげたりしている。(4 3 2 1)
- 授業にやる気をもって参加するようにしている。(4 3 2 1)
- しせいよく話を聞くようにしている。(4 3 2 1)
- ノートをきれいに最後まで書くようにしている。(4 3 2 1)
- 宿題で考えて問題をとことん努力し、ドリルやスキルやプリントをまじめにできるようにしている。(4 3 2 1)
- おうちで、時間内はきちんと勉強するようにしている。(4 3 2 1)

(1・2年生30分 3・4年生45分 5・6年生60分)



〔授業づくり班〕

- ・ 『八枝スタンダード(授業づくり編)』の項目検討及び作成

班での話し合いの中で、学習中の発表が短い言語で交わされるのが気になることから、児童の発表について注目することとした。

そこで、言語活動の大切さと交流活動の2点に絞って、学習活動の中に位置づけることとなった。

- ・ 学習指導案雛形の作成
- ・ 授業改善シートの作成
- ・ 公開授業学習指導案の検討
- ・ 各種研究会参加及び他校訪問

研究発表会や全員研修会等に参加し、内容を報告したり資料を配付したりするなど、教育情報を職員に伝達した。また、オンリーワン校を訪問し、音読暗唱ブック「ひまわり」の効果的な活用の仕方について学んだ。

〔環境整備班〕

- ・ 学級掲示物、廊下掲示物の作成（資料8）
- ・ 学校ホームページの作成
- ・ 交流会に向けた環境整備の立案（校舎内清掃計画）
- ・ 各種研修会参加及び他校訪問

全員研修会等に参加し、校内環境等について情報を集め、職員に伝達した。また、オンリーワン校を訪問し、校内の環境整備について学んだ。

〔学力向上推進委員会〕

- ・ 全国学力・学習状況調査の分析
- ・ 交流会に向けた計画、準備
- ・ 会議録の作成

【2年次】

〔学習規律班〕

○ 概要

- ・ 『八枝スタンダード（学習規律編）』の項目の修正
昨年度同様の項目で実践し、3学期に修正を加え、完成させることとした。

〈姿勢〉

- ・ 帰りの挨拶と移動の時：「椅子を入れて立つ」
発表の時：「椅子を入れない」
- ・ 「聞くとき」の姿勢：手は後ろ、椅子の内側（授業の始めに確認）

〈号令、発表〉

- ・ 手順 ① 姿勢→手を後ろ、先生の目を見る。
② 「今から○時間目のお勉強を始めます。」
「これで（学習を）終わります。」
③ 「はい。」
④ 「気を付け、礼。」「始めます。（終わります。）先生の指示で次の行動。
- ・ 児童「さようなら。」の後、先生の指示で次の行動。
日直～さん、自分のことはあとにしてください。
- ・ 発表回数は特に決めない。「はい」：1回
- ・ 挙手：5、6年は左手で挙手。右手で字を書く。
- ・ 発表の仕方：名前を呼ばれたら、「はい。」
- ・ 「挙手→返事→自分の考えを述べる」
場合によって、「発表します。」「どうですか。」を付け加える。
- ・ 「友達の意見がとてもいいな。」と思ったときに拍手。

〈学習全般〉

- ・ ノート指導：日付、曜日、ページ、めあて、まとめ
- ・ 教科書や文房具の配置：少なくとも学年で統一
- ・ 自習時間：「ひとりで」「立たずに」「しゃべらずに」
- ・ 家庭学習：基礎基本の習熟 低30分、中45分、高60分

- ・ 「勉強がよくわかるための10か条」作成及び各教室への掲示
『八枝スタンダード（学習規律編）』の項目を盛り込んだ言葉で10か条を作成した。「勉強がよくわかるための」の言葉を加え、児童に親しみやすくした。低・中・高の発達段階に適した文言にした。（資料9）
- ・ 学習規律に関するアンケート（児童用・教員用）の継続実施
- ・ 昨年度の質問結果と今年度の質問結果の比較、分析
- ・ 学級掲示物、廊下掲示物の作成（環境整備班と連携して、社会科中心）

資料8

階段に
貼られ
た九九



〈八枝スタンダード（学習規律編）〉

資料9 10か条（低学年用）



○ 具体的な手だてと考察

① 課題 児童数の増加、若年教諭の増加にともない、各学級での学習規律にばらつきがある。教諭によって、学習規律に違いがあり、学年が変わるにつれ、児童に戸惑いが生じている。新学期の立ち上げの際に、教諭もどのように指導してよいのか迷うことがある。

② 手だて（構想） 「新学期の学習規律・学習指導について困ったこと」「児童の学力定着を図るため、必要と思われる学習規律」の2点に絞り、職員にアンケート調査を行い、八枝スタンダードに反映させれば課題が解消され、児童の学力向上へつながると考える。

③ 1年次取組の考察

（教員アンケート）

「身の回りの整理整頓」において、23ポイントの向上がみられ、全項目の中で最大の伸びを示した。また、全10項目とも向上していた。これらのことから、1年次の取組が児童へ指導しようとする教員の意識を高めたといえる。「ノートのとおり方、家庭学習、発表の仕方」においても顕著な向上が見られた。

（児童アンケート）

10項目中8項目が向上し、「みんなにわかるように発表している」は20ポイントの向上で最大の伸びを示した。

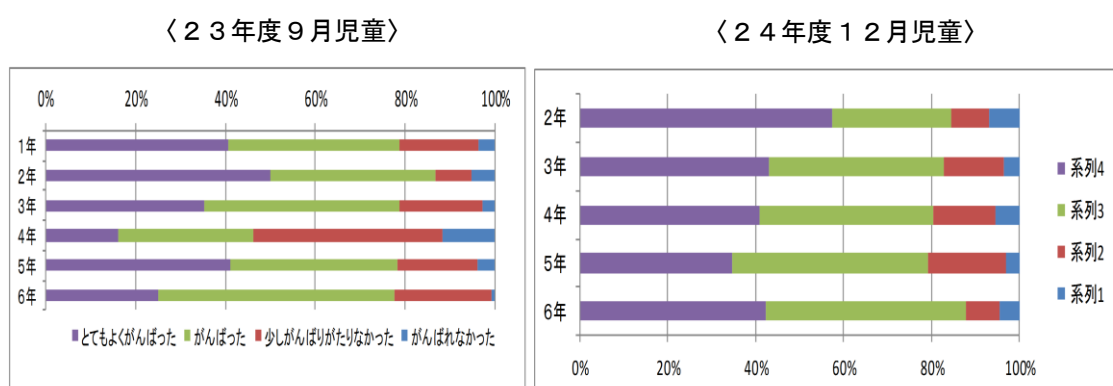
（実践交流会）

参加者のアンケートから、「学習規律が守られていた。」「人数が多いが落ち着いていて、まとまりがあると感じた。」「下足箱や子どもの机上・棚などからも生活規律、学習規律が整っていることが感じられた。」などの声が寄せられた。また、「子どもたちのさわやかな挨拶に迎えられた。」という意見もあった。

④ 2年次取組の考察

ア 昨年度（23年9月）と今年度（24年12月）の教員用、児童用のアンケート結果より

○ 特徴的な項目（身の回りの整理整頓について）



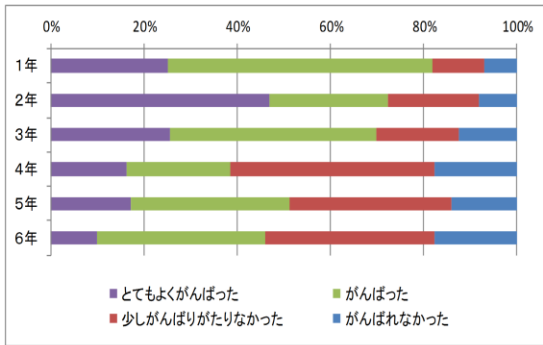
・ 教師の声掛けの効果が表れていて、5つの学年においてポイントが増加している。特に現2年生及び現5年生の「とてもよくがんばった」のポイント増加が顕著である。

また、「少し頑張りが足りなかった」「がんばれなかった」を合わせたポイントが今年度は、全学年で20%弱になっていることから、約一年間での本校全体として児童の意識向上が伺える。

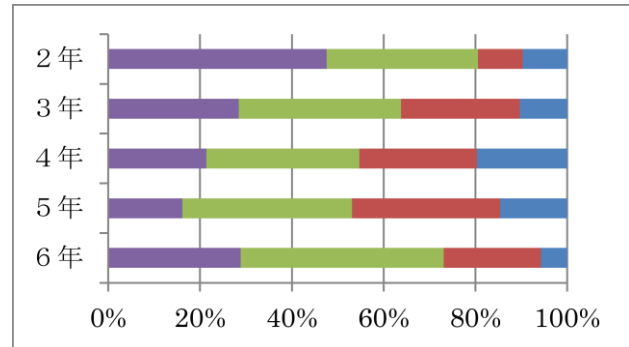
学年が上がるにつれ、「とてもよくがんばった」が減少傾向にあるのは、児童の自己評価力の高まりとも考えられる。

○ 特徴的な項目(発表について)

〈発表について・23年度9月児童〉



〈発表について・24年度12月児童〉

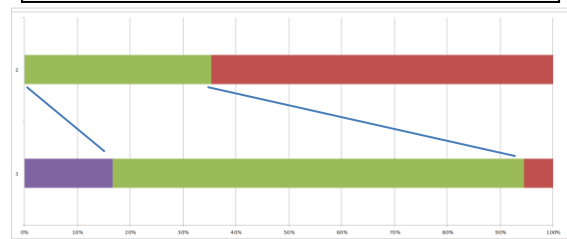
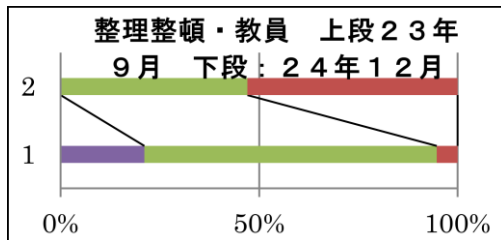


- 児童のアンケート結果から、発表は全体的には昨年度の現状維持といえる。現5年生と現6年生においては、向上傾向にあることが伺える。

ただ、現3年生と現4年生においては、「とてもよくがんばった」「がんばった」の合計ポイントが減少していることから、今年度『発表について』課題があったことが伺える。「発表の仕方」の例の掲示や、「はじめに～次に～最後に」等の論理的な話し方や「もし～が～ならば、」等の仮定する話し方などの指導を今後も丁寧に行い、児童に発表についてがんばったという意識と自信をつけさせることが大切であると考えます。

○ 教員アンケートより

発表・教員 上段：23年9月 下段：24年12月



- 身の回りの整理整頓が児童に定着してきたことについて、昨年と比べ向上したと考えている教員が多い。児童が整った環境の中で、落ち着いて学習に取り組んでいるといえる。

また、発表についても、向上している。しかし、児童の意識とは、ずれがある。児童に自ら考えさせ発表する中で、しっかりと発表に関する基礎・基本を身に付けさせるテクニックの修得と、じっくりと児童に考えさせて、考えをしっかりとめさせる場面をきちんと確保する必要があると考えます。

以上のように、2年間のアンケート結果からは、児童・教員ともに学習規律の向上を感じさせるものとなっている。これまでの取組が確実に成果を挙げているものととらえることができる。また、向上感を児童・教員それぞれが実感として感じていることが分かる。今後は、両者のずれを埋めるような取組を工夫していく必要がある他の項目でのずれも、少しでも減らしていかななくてはならない。

イ 24年度（2年次）交流会での意見交換より

まず、学習規律班の取組の成果と課題について以下のように伝えた。

共通理解を図った内容〈姿勢〉・〈号令・発表〉・〈学習全般〉を、無理のないように徐々に行っている。また、アンケート（24年9月実施）を、昨年度の結果（23年11月実施）と比べると、教員のより一層の意識向上がうかがえ、児童の意識も高まっている。さらに、勉強がわかる10か条の掲示により、一層の向上を図っている。アンケートの実施時期だけでなく、年間、日々の学習の中で意識させていきたい。

低・中・高学年で分けてみると、低学年、特に2年生は特別支援を要する児童が多く、CRTが全国比より低い。よって、朝自習での計画的な取組（月曜日・・視写、火、水、金曜日・・計算プリント）を行っている。

中学年は、特に4年生が全体的に落ち着いている。しかし、発表の際、はずかしい、人前が苦手等の意識が生じ、消極的になってしまうことがある。そこで、発表者に拍手をする等して認められているという雰囲気づくりを大切にしている。また、ひまわりの暗唱やグループ活動にも積極的に取り組み、みんなで行っているという意識を高めようと努めている。

高学年は、学力が向上していることを、全国学力・学習状況調査やCRTから実感している。特に、6年生の理科においては、専科指導の効果もあり、大きな成果を感じる。綿密な授業準備や丁寧なノート指導等あらゆる点で専科のよさが生かされている。6年生の課題としては、アンケートの「やる気」の項目の低さが挙げられる。学習内容の難しさが、理解不足の児童にとって、より強く意欲の低下に影響しているのではないかと思う。やはり、全体の学力向上が必要であると思う。

本日公開した社会科においては、まず、予習として自分で調べておき、授業の事前に各自のめあてを担当が確認した。そのことによって、理解不足の児童には、より分かりやすい声かけを準備して授業に望んだ。また、調べ学習をしてきたノートの感想の欄にはコメントを書き、意欲の向上を図った。

これに対し、参加者から各校での実践をもとに以下のようなアドバイス等をいただいた。

- 自学ノートの活用に留意している。特に、家庭学習について、他学年の家庭学習の状況について、意見交換をしたり、漢字、計算ドリルの自主的な取組を行ったりしている。
- 学習規律の約束事について、全職員で共通理解をしたり、全クラスをそろえたりするのは厳しい点もある。ガチガチに固めるのではなく、できる範囲で徐々に行っていく必要がある。
- アンケートの決め方について、たたき台を作成し、職員の中で話し合いを重ね、決めていくことが大切である。学習規律の項目を皆で話し合うことで、様々なやり方をもっている先生方の共通理解が深まり、クラス替えをしても統一した学習規律が実行されることにつながる。

また、家庭学習の重要性について、保護者に、学級通信や懇談会、家庭訪問等を通して発信している。宿題ができていない児童への対応として、「するのか、しないのか、どうするのか？」の声かけを行い、その判断は児童に任せても、最終的には必ずやらせることが大切である。

- 全職員「待つ」ことを大切にして指導にあたっている。特に、手遊び等している児童を見逃さないように、一つ一つの場面を大切にしている。学級全体が温かい集団になるよう心がけている。

ウ 交流会を終えて

今回の交流会を通し、全校で共通した学習規律の必要性や有効性について、本校職員だけでなく他校の方々も同じように考えていることを確認できた。そのことにより、自分たちの実践に対する新たな自信へとつながった。今後は、決められた学習規律をどのように児童へ浸透させるかが課題と考える。今回、参加いただいた学校の実践や参加者からいただいたアイデアを参考にしながら、学習規律を児童によりよく身に付けさせていきたい。

また、家庭学習の重要性についても痛感させられた。今後、今まで以上に家庭学習の徹底に向けて取り組んでいきたい。

[授業づくり班]

○ 概要

- ・ 『八枝スタンダード（授業づくり編）』の項目の修正

本年度は、どの教科にも適応できるよう、「言語活動の一貫性」を「言語活動の工夫」と改めた。さらに、「他教科・他単元との関連を図る」という文言を付け加え、他教科とのつながりを意識して取り組むようにした。

それにともない、「言葉の力を高める」を「言語活動の充実」と改め、言語活動の内容について共通理解を深めた。

○ 言語活動の充実を図る。

- ・ 言語活動の工夫（他教科・他単元との関連を図る）
- ・ 交流活動の設定

○ ICT機器の活用を図る。（資料10）

○ 判断基準を明確に示す。

評価規準（B）を基にして、Aとなる判断基準を明確にするとともにBに達していない児童への具体的な手だてを示し、きめ細やかな指導と評価の一体化に努める。

○ 授業改善シートの活用を図る。

- ・ 学習指導案雛形の修正

修正した点として、「指導に当たって」の箇所にく言語活動の充実を図るための手だてとく交流活動の具体的な場面や方法を明記するようになった。これは、上記の『八枝スタンダード（授業づくり編）』の項目の修正を反映させたものである。また、主となる言語活動の部分に他教科、他単元との関連を示すようにした。

- ・ 授業改善シートの修正

修正点として、授業ポイントに「主となる言語活動(関連)」を新たに設け、各授業者が授業に適した文言を記入するようになった。また、「交流活動」の文言も授業者が授業に合わせて書き込むように改めた。

本校の特長として盛り込んだバランスシートについては、今年次も続けて使用することとした。（資料11）

資料 10 実物投影機を活用した音楽科の授業



資料 1 1 授業改善シート

授業改善シート			
授業日	年	月	日
授業者	科	単元	単元
参加ポイント			
<p>① 教材は「人々の生活をサポートし、生活に役立つ」観点から選定されている。</p> <p>② 単元の目標に示した「言語活動」が授業中に実施されている。</p> <p>③ 「言語活動」が「言語活動」の観点から実施されている。</p> <p>④ 「言語活動」が「言語活動」の観点から実施されている。</p> <p>⑤ 単元の目標が明確で、授業を促すものになっている。</p> <p>⑥ 単元の目標が明確で、授業を促すものになっている。</p>			
主となる言語活動(関連)			
交流活動			
自由記述欄			
評価・意見等記入欄			
<p>バランスシート</p> <p>授業の目標 単元の目標</p>			

- ・ 指導主事要請をしての公開授業学習指導案の検討及び模擬授業

公開授業する学習指導案について、学年ごとに内容の検討を行った。特に、八枝スタンダードの項目について確認した。

また、各教科指導主事に来校していただき、指導・助言を受けた。さらには、模擬授業を行い指導・助言を受けた。



指導主事を要請した
指導案検討



模擬授業を実施
して指導主事に
助言を受ける

- ・ 昨年度交流会で授業公開した教員による校内での模範授業

昨年4年生を担当していた教員（昨年度算数科授業を公開）による授業公開を実施して、全教員で参観した。昨年度の研究内容を授業を通して、確認することができたとともに、若年研修としても効果的であった。



模範授業の参観

- ・ 各学年での事前授業の実施

各学年で事前授業（B研）を行い、同学年及び学力向上推進委員会を中心に参観し、授業内容について協議を行った。

- ・ 各種研究会参加及び他校訪問

折尾西小で実施された福岡県小学校国語教育大会を校内研修と位置づけ、全職員で参加した。



先輩教員からのアドバイス

○ 具体的な手だてと考察

- ①課題 児童にとって学校が楽しい場所であるには、勉強が分かるということが大切である。

指導者がかわることによって授業内容に優劣が生じ、児童の理解を妨げている現状があるのではないかと。特に、若年の教諭が多い本校は、そういった傾向が生じやすいのではないかと危惧される。

- ②手だて（構想） 授業づくりにおいて、八枝小で統一した事項を盛り込むことにより、授業格差を軽減させることができるのではないかと考える。だれでも、どの学年でも大切にしたい指導ポイント（共通事項）を八枝スタンダードとして確認することで、指導者がかわっても同じような授業が受けられる。このことで、児童も保護者も学習理解に対する不安を減らし、学校・教師への信頼につながると考える。また、継年的な指導を重ねることで、学力の定着につながると考える。

- ③1年次取組の考察

2年（国語科）・4年（算数科）・6年（国語科）による授業公開を行い、そこから、言語活動の充実を図る組織的な取組を一層充実させる必要があることが明らかになった。

- ④2年次取組の考察

ア 授業公開より

公開する教科を3教科に増やし、国語科（1年・5年）算数科（2年・4年）社会科（3年・6年）と低中高のバランスをとった公開とした。どの授業にも、言語活動の工夫（他教科・他単元との関連を図る）と交流活動の設定の2点を盛り込み、授業づくりを行った。授業づくり

班を中心に、各学年での協議も自主的に行われていった。さらには、夏季休業中の指導案検討のみならず模擬授業の実施にまで発展していった。授業づくり班はもとより、学年全員ひいては全担任が授業づくりのポイントについて共通理解を深めることができた。

第5学年の国語科の授業では、言語活動の充実を図るため、他教科・他単元との関連を図りながら単元を貫く言語活動（討論会）を設定した。具体的には、社会科で学んだことや、節電・リサイクルに取り組んだ経験と関連させて、自分の意見を記述した文章を書いて討論するという活動が行われた。

また、交流活動の設定も積極的に行った。二人組での交流、グループでの交流と必要に応じて、形態を変化させながら活動を行った。そうすることでより効率的に活動ができ、児童の活動意欲を損なうことなく活動を継続することができた。児童の発達段階に適した交流活動を行うことや、高学年でも2人組といった少人数での交流活動が効果的であることなどが分かった。このような交流活動が児童の考えを確かなものへと導いていった。（資料12）

イ 24年度（2年次）交流会での意見交換より

実践交流会では、以下のような質問（○）が出され、意見交換（□）が行われた。

- 言語活動の充実及び交流活動について、1年生の授業では、自分の考えを深める場面で交流活動が実施されていた。自分の考えを深めるためには、まず、自分の考えをもつ必要があると考えるが、八枝小学校では、自分の考えをもつためにどのような工夫を行っているのか。
- 交流場面では、お互いに発表して終わりということのないように、相手に質問する、意見するという活動を取り入れ、何のために話すのかという意識をもたせるようにしている。また、交流活動のねらいや工夫として、「同じところを見つけよう」「自分の中のぼんやりとした考えをはっきりさせよう」等の指示を行い、自分の中のぼんやりとした考えがはっきりし、より確かな学力となって定着することを体感させることを心がけている。
- 単元に入る前に、どのように学ぶ意欲をもたせたのか。
- 教科があるから学習するのではない。それでは学習意欲も落ちる。国語科を例にあげると、1年生では生活科や遊びの中から導入し、「図鑑をつくらう」という目的意識をもたせ、図鑑を作るために書こうという意欲をもたせるようにした。加えて、どうすれば図鑑を作りたくなるのかという点を工夫し、保育所の友達に見せるため等の相手意識をもたせることが効果的であると考えた。このことで、分かりやすく書く必然性も生まれ、書く作業に対して各自の思いが生まれてくると考えた。
- 他校の工夫として、国語科においては、言語活動の一貫性を重視し、教材との出会わせ方を大切にしているとの話があった。児童の意識を高め、児童の考えを確認するために、交流活動を取り入れていることも紹介された。
- 6年生の授業について、社会科の討論はよくあるが、歴史的な単元での討論は難しいと考える。それは、答えが出ている内容だからだ。今回の討論場面では、どのような手だてをうったのか。
- 本校では、交流活動を取り入れながら討論した。あえて、開国したということを知っている中で討論させた。言語活動の他教科との関連を図る目的で、5年生の国語で学んだ「討論」という

資料12



方法を各教科に生かすよう心がけている。

- 3年生の社会科では、「北九州市の観光パンフレットづくり」でG Tを活用した導入を行っていた。このパンフレットづくりは、だれのためのものなのか、また、児童にどのように、このパンフレットを活用させるのか。
- 今回3年生にはG Tの孫がいたので活用した。大人の仕事を自分たちに任されたという「うれしさ」を社会科の学習につなげた。また、観光パンフレットを作ることがゴールではなく、これまで学習したことをもとに再構築しながら作ることを意識させた。パンフレットは観光地に来た人、まだ北九州に来たことがない人に見てもらうための物である。今回の取組は八枝小の「ふるさとかるた」への関心の高さからきたものなのかという質問があったが、必ずしもそうとはいえない。「ふるさとかるた」は全児童分部数がそろっているわけではない。しかし、本単元を行う上で効果的ではあった。また、「ふるさとかるた」を改めて児童に知らせることができた。
- 4年生の授業では、児童を引きつける工夫が多く見られた。児童の発表に「まず、つぎに～」が定着していた。学校全体の取組なのか、またそうであれば、言語活動の充実のための取組は他にどのようなものがあるのか。
- 発表の仕方については、各教室に掲示してある。貼るだけではなく、低・中・高のレベルを考え、国語科と系統づけて発表させている。また、友達に分かるように説明するように指導してきた。さらに、友達の発表の後に「いいな」と思ったら拍手をし、認めるようにうながしてきた。
- 同じ授業を参観した方からは、4年生の児童が、学び方をよく理解していたことを紹介していただいた。例えば、自分タイムは自分で、話し合いタイムは交流をとという様に、自分達で進んで取り組むことができていたこと、また、発表した後は、拍手が自然と生じ、あたたかい雰囲気になっていたことなどが紹介された。

ウ 交流会を終えて

交流会の様子



交流活動を行っていくことで、授業中における児童の成長が感じられ、やりがいがあった。それを裏付けするような内容の意見を、参観者の方々から寄せていただき、今後の実践への自信へとつながった。ただ、言語活動の工夫は、まだまだ難しさを感じる。ペア学習のやり方など、どのような言葉のやりとりを指導していけばよいのか、今後さらに深めていかななくてはいけない。ただのおしゃべりになってしまう児童への対応も重要である。

〔環境整備班〕

- 概要
 - ・ 学級掲示物、廊下掲示物の作成（社会科を中心に）（資料13）
 - ・ 生活科、社会科の掲示物
 - ・ 国語科の「言葉の学習」
 - ・ 勉強がよくわかるための10か条を作成した。

また、特別支援が必要な児童に対し

て、個別に指示が行える掲示物も準備し、個に応じた指導が行いやすくなるようにした。

- ・ 学校ホームページでの研究の紹介

資料13 6年生社会科に関する掲示物



- ・ 交流会に向けた環境整備の立案（校舎内清掃計画）

交流会に向け、PTAに協力を要請して、日頃児童の手で清掃することが難しい箇所を中心に、窓ふきを行ってもらった。（37名の参加）

- ・ 各種研修会参加及び他校訪問
- ・ 掲示物の認知度に関する聞き取り調査



窓ふき清掃

児童に対して、掲示物をどれほど認知しているかの聞き取り調査（休み時間に掲示物をどれほど見るか、掲示物の存在を知っているか等）を今年度中に行う。

○ 具体的手だてと考察

- ①課題 学級毎で教室内の掲示物の量や添削等の違いが目立つ。

廊下の壁等が有効に利用されていない。

- ②手だて（構想）多くの児童が日常何気なく目にする廊下や階段を利用して、学習の基礎的内容を掲示し、児童への定着を図れば、学力向上に効果的であると考え。

学習の基礎的要素を多く含む国語科や計算力を高めることが学力向上につながる算数科、多くの知識理解を必要とする社会科を中心に掲示を行っていく。

実践を重ねていく中で、各教科必要なものを話し合い掲示物を増やしたり、入れ替えたりしていく。

- ③1・2年次取組の考察

ア 学級掲示物、廊下掲示物の作成を中心に活動した。

イ 24年度（2年次）交流会での意見交換より

本校の掲示物の取組として、

1年生：月行事

2年生：町たんけんで見つけたものの発見カードを見て作成したマップ

生き物大作戦・・・すみかや飼い方などをまとめているもの

3年生：社会科中心に6枚の掲示物（工場や夜景のポスター、北九州パズルなど遊べるもの）

4年生：「消防士さんといっしょ」での活動の様子

5年生：国旗クイズ・都道府県クイズ・いろいろな言葉（国語科）の掲示物

6年生：歴史クイズ（授業の中でも使用できる42名の歴史上の人物や顔写真）の掲示等を紹介した。また、算数科の1㎡のシートでよく子ども達が遊んでいる（4年生）、英語や他教科の掲示物がほしいという声があがっている（6年生）ことを補足説明した。

質問としては、10か条にしたわけを尋ねられた。同時に10か条は多いのではないかという意見をいただいた。また、学習規律はどの学年の課題でもあるのかという質問もあった。10か条全てを1度に行うのではなく、学習のめあてとして「今日は○番をしてみようか」など、段階的にやっていることを説明した。また、できた番号に花をつけていく等の工夫も説明した。10か条はあくまで、きりのよい数を示したこと、また、学習規律の定着の実態は各クラスによって違いはあるが、全校で同じ内容で取り組む点に意義があることを説明した。

参加された先生方からは、本校の取組のように、どの学年・学級にも同じ掲示物があると、児童の意識付けによいという意見が出された。さらに、掲示物について、個人情報取り扱いや掲示物が児童の顔に当たらないような掲示の工夫をする必要があるという意見をいただいた。

ウ 交流会を終えて

今後は、「音読・暗唱ブック ひまわり」の拡大コピーや特別に支援が必要な児童を対象に視覚にうったえる掲示物（例えば「走らない」を意味するには走っている人のイラストに×印をつける等）、委員会の活動として星座を理科室前に掲示する等の活動に取り組んでいく予定である。今回の交流会でいただいた意見を、今後の実践のヒントとしていきたい。多くの学校の実践を交流することで、自分たちだけでは気が付かない多くのことが学べ、有意義であった。

[学力向上推進委員会]

○ 概要

- ・ 全国学力・学習状況調査、観点別到達度学力検査の分析
- ・ 各班からの計画内容の提案・審議のサポート
- ・ 交流会に向けた計画、準備

昨年次の交流会の反省より、今年次の交流会の持ち方を、班毎での交流会に変更した。それにともない、全体会の会場設営では会場後方に各班が集まれるスペースを設け、車座になって話し合えるようにした。

○ 具体的な手だてと考察

①課題

児童の学力の向上・定着に向けて職員個人々々が日々努力してはいるが全職員のアプローチの方向性が必ずしも一致しているとは言い難い。

学年が上がったり、クラス替えがあつたりすると先生の方針の違いにより児童に戸惑いが生じている。

②手だて（構想）

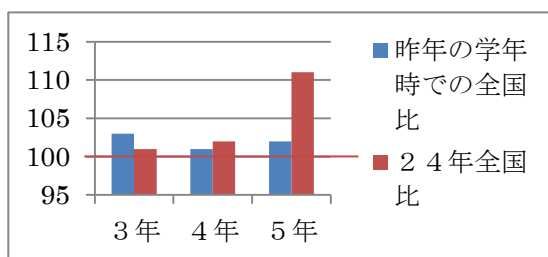
全国学力・学習状況調査やC R Tの分析を細かく行い、児童の実態を明確にすることで共通の課題が浮きぼりになるであろう。そこから、全職員が向かう方向性を定めるようにする。

③1・2年次の取組の考察

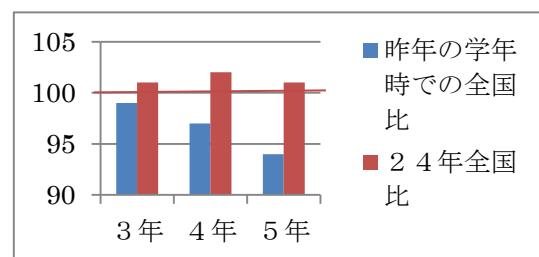
- ・ C R T、全国学力・学習状況調査結果の分析

< C R T（教研式標準学力検査 4月17日実施）より >

《国語科》



《算数科》



《国語科》

- ・ 23年度、24年度とも全国比を上回る学年が多く、研究の成果が出ている。
- ・ 5年生がこの1年間で大きな伸びを示している。

《算数科》

- ・ 23年度は全ての学年で全国比を下回っていた。上学年の方が全国比との差が大きかった。

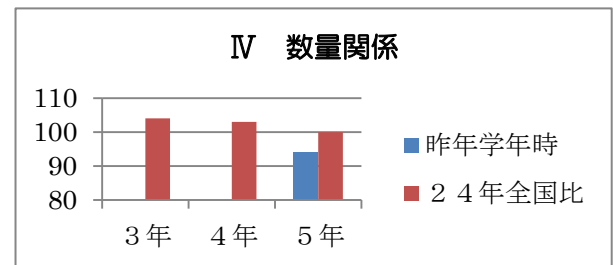
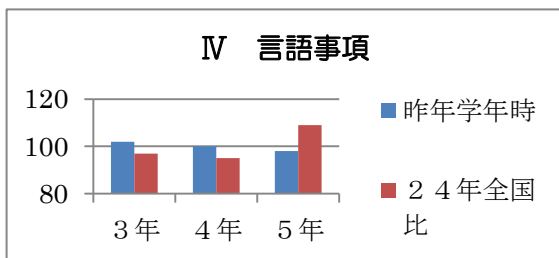
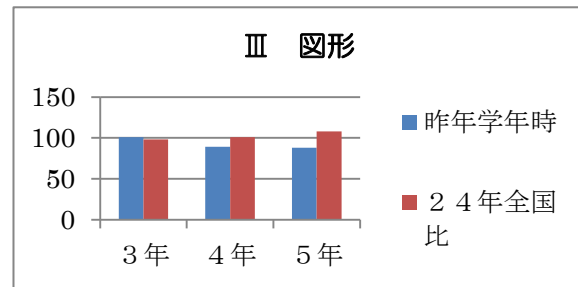
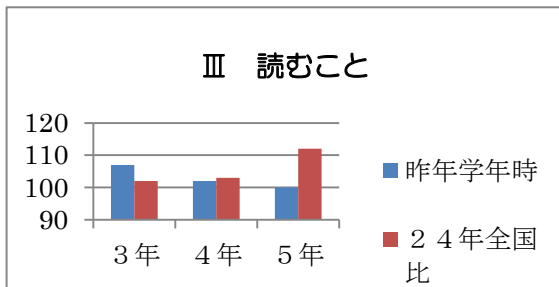
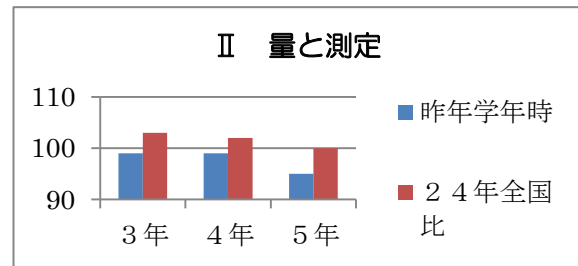
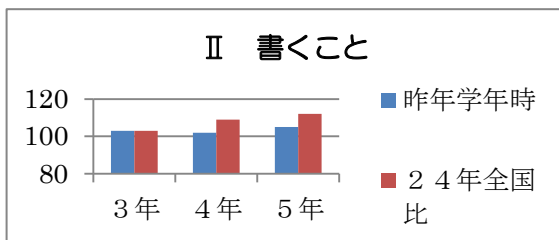
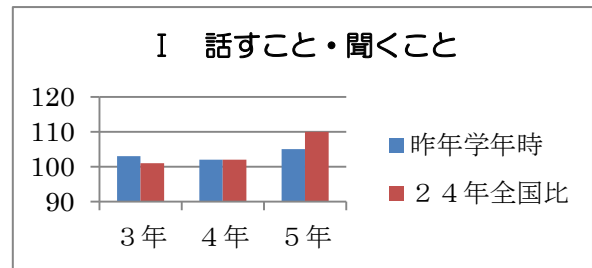
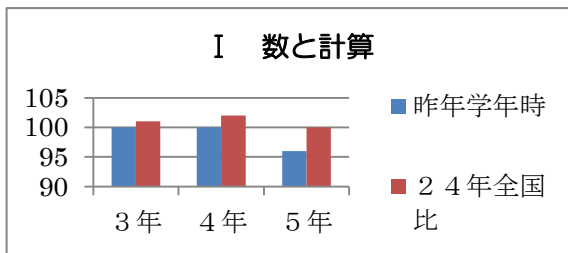
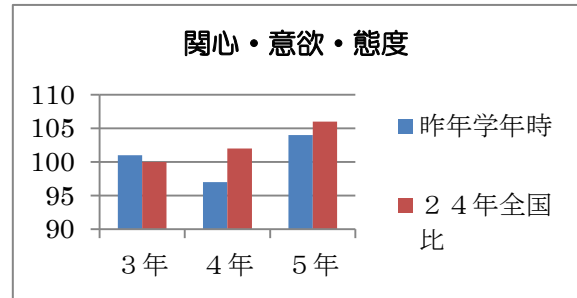
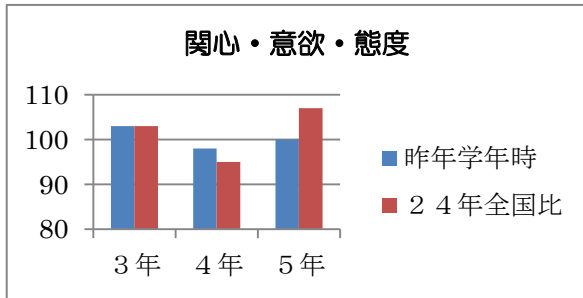
- ・ 24年度は全国比を上回り、昨年度と比較すると、大きな伸びを示している。

次に、観点別に比較を行った結果は以下の通りである。

観点別

《 国 語 科 》

《 算 数 科 》



《国語科 昨年度と24年度の比較から》

※ 3・4年昨年度データなし

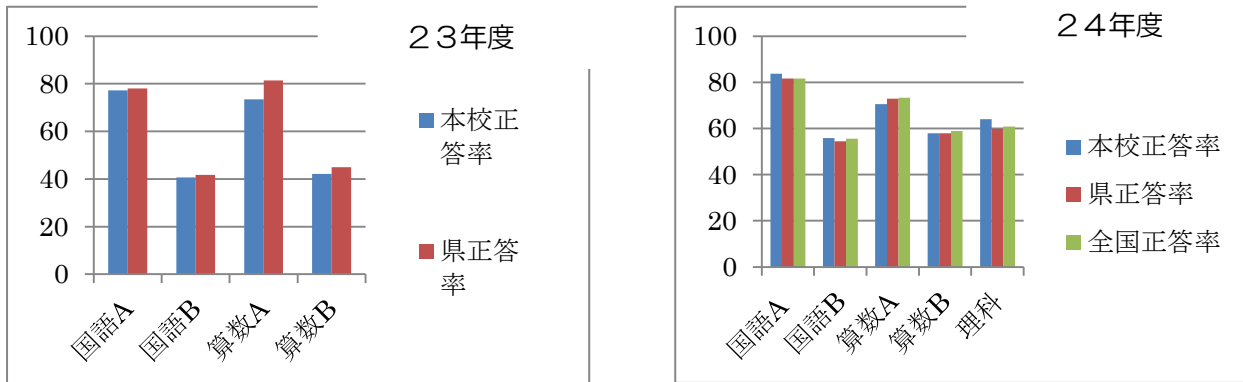
- ・ 「話すこと・聞くこと」「書くこと」、「読むこと」の領域は全国比を上回っている。
- ・ 昨年度に比べ、言語事項のポイントが低下した学年が2学年あり、全国比も下回っている。

〈算数科 昨年度と24年度の比較から〉

- ・ 3年生の図形を除き、各領域とも向上している。全国比も上回る傾向にある。

※ 両教科ともに、5年生の伸び幅が他の学年に比べ、大きい。

〈全国学力・学習状況調査結果（6年生）より〉



23年度は、4項目全て県正答率を下回っていたが、24年度は、国語A・国語B・理科において県正答率及び全国正答率を上回っている。特に、今年度から始まった理科については、全国正答率を約3ポイント上回っている。これは、理科専科を取り入れた学習形態が児童の学力向上に大きく貢献していると考えられる。また、国語科についても、昨年度からの取組が効果的であったと考える。

算数科においては、今年度も県正答率を上回ることではできなかった。しかし、算数Bについては、県正答率と同じ正答率、全国正答率とは1ポイント差となった。昨年度県正答率を3ポイント下回っていたことと比較すると、児童の学力向上が伺える。特に算数Bが向上したことから考えると、交流活動を取り入れた授業形態が思考力の向上に効果的であったのではないかと推測される。

算数Aにおいても、昨年県正答率と8ポイント差があったものが、2ポイント差まで縮まっていることを考えると、着実に基礎的・基本的な学力が定着していることが伺える。

以上のことから、昨年度からの本校の取組が、児童の学力向上・定着に効果的に働いていると考えられる。今年度も昨年度の取組を引き継ぎながら進めていけばよいことを裏付ける結果だと考えている。

〈CRT及び全国学力・学習状況調査の結果の分析より〉

- ・ 昨年度の取組を今年度も自信をもって続けていって大丈夫であること。
- ・ CRTの結果から、向上が著しい現5年生の授業に学ぶため、1学期の早いうちに公開授業を行い、全職員で参観し、今年度の研究の方向付けをすること。
- ・ 学習規律班の「身の回りの整理・整頓」が、CRTの向上につながっていると推測されることから、今年度もより一層の整理整頓に力を注ぐこと。
- ・ 環境整備班の行った掲示物をより多くの児童が関心をもって見ている姿や、教室内の掲示が交流活動の活発さにつながっている様子から、今年度も、より児童の注目を集める掲示物の作成に取り組むこと。

(2) その他の取組

- ① 学校図書館の整備

本校は、平成21年度より「学校における読書活動推進モデル事業」のモデル校（永犬丸中学校区）として、学校図書館の整備及び効果的な活用に努めている。具体的には、ブックヘルパー（保護者により休業日を除く毎日2名）の活用により、図書館の常時開館を実現している。

また、「未来を開く学校づくり支援事業」の支援を受け、新刊図書の整備や書架の購入、低学年図書室の畳の読書スペースの設置などを行ってきた。現在は、昼休み時間の利用者が毎日50名程度おり、児童の1ヶ月間の平均読書冊数も学年に1人40冊をこえる学年もある。

図書館が常時開館されており、常に大人が管理しているため、授業中の調べ学習の充実や読書意欲の向上など、児童の学力の向上に側面から寄与している。さらに、24年度の2学期からは、バーコード化も導入され、児童の利用手続きが簡素化されより効率的な図書室の活用が行えるようになったことも学力向上につながるのではと期待している。



② 専科指導教員による授業（理科）

昨年度、専科指導教員を配置していただき、小学校における専科指導の効果等についての研究を進めている。

具体的には、5・6年生の理科の授業を専科指導教員が受けもっている。

専属の指導者による統一した授業を行うことにより、専門性の高い高学年理科の授業を充実させることができ、児童の学力の向上に役立っている。全国学力・学習状況調査の結果からもその成果がうかがえる。



7 研究の成果と今後の課題

(1) 1年次の成果と課題及び課題に対する2年次の成果

【1年次】 成果○ 課題●

- 三つのプロジェクト班を編制することで、各班の専門性を生かしながら綿密な活動が行えた。
- 学習規律面で1～6年生までの統一事項が作られ、系統的な指導を行う基盤が築けた。
- プロジェクト班での活動や実践を通して、教員の「学力を向上させていこうとする意識」がより一層高まった。
- 授業作りを綿密に行ったことにより、児童の学習時間における集中力が高まったとともに、交流活動が活発になった。
- 学校全体に落ち着きを感じられるようになったとともに、市販テストの結果で確かな学力の定着が見られた。
- 学力の定着の検証が十分にできていない。
- 学力向上推進員委員会やプロジェクトリーダー会議の時間の確保ができなかった。
- CRT等の分析に基づく、年間を見通した授業づくりができなかった。
- 「言葉の力」を高める組織的な取組を一層充実させる必要がある。
- 小中の連携を考えた学習規律の設定が必要である。

1年次の5点の課題を基にした、2年次の取組における成果は次の通りである。

【2年次】

- 昨年度と今年度のCRT及び全国学力・学習状況調査の結果を比較することによって、学力の定着具合を把握することができた。昨年度からの取組が確実に成果を上げていることから、本研究を続けていく自信をもつことができた。
- 各班のリーダーとの会議を行うことによって、各班での活動や班同士での連携に必要な連絡

を、推進委員長が行いやすくなった。また、昨年度に引き続き、3つのプロジェクト班が活動することで、班の専門性を生かした活動が効率よく行っていた。(資料14)

資料14 各班の活動の様子

学習規律班 (10か条の作成)



授業づくり班 (会議)



環境整備班 (掲示物作成)



- CRTや全国学力・学習状況調査の結果を観点別に分析することにより、児童に最も身に付けさせる必要のある観点を明確にすることができた。
- 授業づくり班を中心に言語活動の工夫と交流活動のもち方を確認することを通して、教科間の共通認識を行うことができた。国語科のみでなく、算数科、社会科など、ほぼ全ての教育活動で言語活動の充実を図る必要があることを確認したり、授業の中で交流活動を行うことが学力をより確かなものにしていくという確認を行ったりした。また、検証教科が3教科に増えたことにより、それぞれの教科の特質を綿密に話し合ったり、考え合ったりすることができた。さらに、交流活動を充実させることは、ICT機器の積極的活用にもつながった。機器の使用方法など教え合う場面も多かった。教科別に指導主事の方々に来校を願い指導案協議を計画的に行ったことで、研究が充実するとともに、より詳しく授業について考えることができた。
- 小中連携の視点としては、北九州市の不登校対策研究モデル校として中学校区という枠組みの中で、挨拶に焦点を当てて行うことにした。自分の気持ちを確実に相手に伝える挨拶も、広い意味での交流活動と考えることができ、本校の取組ともつながるものである。中学校区で統一した挨拶についての掲示物を作成したり、中学校教諭が登校時間に来校し、本校児童への挨拶運動を行ったりしている。

(2) 今後の課題

- 昨年と今年度のCRT結果の比較による学力定着の検証を中心に行ったため、2年生の学力の定着の検証ができていない。3学期に市販テストによる検証を行う。
- 学力向上推進委員会の時間の確保が、1年次よりは増加したが十分とはいえなかった。来年度は、年度当初に推進委員会の年間の時間設定を行う。
- CRT等の分析に基づく、年間を見通した授業づくりとはいえなかった。3学期に児童の課題に重点を置いたカリキュラムづくりを各学年で行っておく。
- 言語活動の充実を図る組織的な取組を一層充実させる必要がある。そのために、3学期より朝自習時間を活用した全校一斉での音読・暗唱を実施する。
- 八枝スタンダードの作成については、項目内容の修正や実践を中心に作業を進めてきたため現時点では冊子等にまとめることはできていない。来年度は冊子にまとめる。

《参考文献》

- ・ 北九州市教育委員会指導部編集 「指導の重点」 2012年
- ・ 北九州市教育委員会指導部編集 「北九州スタンダード すべての教師のための授業改善ハンドブック」 2010年